

京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会

Studies on the Cultures and Societies in Premodern Inner Asia and its Adjacent Areas

2. 研究代表者氏名

稲葉穰

Inaba, Minoru

3. 研究期間

2019年4月-2023年3月

4. 研究目的

いわゆる古代文明発祥の地であり、伝統的に独自の歴史文化を形成してきたとみなされる西アジア、南アジア、東アジアは地理的には海上と内陸アジア（中央アジア、中央ユーラシアとほぼ同義で用いる）の陸上ルートを通じて様々な形で接触してきた。その接触の場を提供し、時にこれら大陸縁辺の世界に多大な影響をおよぼした内陸アジア世界もまたそれらの地域と同等に一つの文化世界、歴史世界であるかのように措定されてきたが、そのイメージは砂漠とステップと遊牧部族が支配的な空間、というものであった。しかし20世紀末にソヴィエト連邦が崩壊し、バミール以西の内陸アジアが世界の研究者に対して門戸を開き、また東トルキスタンにおいて中国の非常に活発な研究が進んだことにより、当該地域を研究するための材料や視点は漸次増大してきている。このような状況を踏まえ、今後進められねばならないのは、上述のようにステレオタイプ的に理解されてきた内陸アジア内部の地理的な diversity や、社会結合のあり方、都市に関するより詳細な研究である。本研究班は古代から近代に到る内陸アジアとその隣接地域に関する様々な社会研究、文化研究のケーススタディを積み重ねることで、多様な内陸アジア像を描き出し、ステレオタイプ的な理解の克服を目指す。

West, South, and East Asia, traditionally regarded as "civilizational centers", have been in contact with each other through maritime and inland routes. Inner Asia (almost synonymous with Central Asia/ Central Eurasia), which served as a contact zone for these areas and at times greatly influenced them, has also been perceived as an independent historico-cultural world. Even today, the common image of Inner Asia is one of deserts and steppes where monolithic, nomadic tribal societies and cultures prevail. However, starting with the last two

decades of the 20th century, materials for further researching the history of the area in question have started to become increasingly available. Based on such materials, the issue of the diversity of societies and cultures within Inner Asia has been attracting more and more attention. The purpose of our research project is to shed light on the history and culture of Inner Asia through case studies of its societies and cultural interactions, etc. from antiquity to the early modern period.

5. 研究成果の概要

ペルシア語地方史『ヘラート史』の新出写本の会読と、内陸アジア前近代社会に関する研究報告を並行して進めるべくスタートした共同研究であったが、2019年度末からの新型コロナウイルスのパンデミックにより、対面式での研究会や講演会が困難となったため、ほぼ全面的にオンラインに移行し、集中して写本会読を進めた。その過程でオンライン・ミーティングがテキスト会読に向いている（各人の書庫から関連史料が次々と例示されるなど）ことがわかるなど、新しい発見もあったことは特記しておく。結果として予定通りに会読は終了したが、日本語訳注作成を進めるために一年間の延長を希望し、2022年度はほぼ訳注の再チェック作業にあてた。最終的な仕上げ作業は班長の責任で行うが、対面式の研究発表が困難になった状況の中では十二分の成果を取めたと考えている。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

『ヘラート史』の訳注を、電子テキスト（無料）の形式で発表する予定で作業を進めている。これが公表されれば同史料についての初めての外国語訳注となり、従来ほとんど知られていない重要史料に簡便に接することができるようになる。